第３９回肝臓教室講演
「肝がんの最近の話題」　　第三内科　田尻和人

肝がんは予後不良な病気ですが、ではここ数年で薬物療法が格段に進歩してきています。２００９年に初めて肝がんにおいて生存延長のエビデンスを示したソラフェニブが登場して以降、約１０年にわたり新規薬剤はでてきませんでしたが、ここ２，３年でレゴラフェニブ、レンバチニブ、ラムシルマブ、カボザンチニブと計５剤の分子標的薬が使用可能となりました。また、近年他臓器のがんで有効性が報告されている免疫チェックポイント阻害剤も、肝がんにおいて分子標的薬の併用での極めて有効な成績が報告され、2020 年 10 月に使用可能となりました。免疫チェックポイント阻害剤は、われわれが本来もつ免疫の力を最大限に発揮させ、効率的に抗がん作用を示すものです。今後肝がん領域では、こうした免疫チェックポイント阻害剤と分子標的薬の併用療法が登場してきて、治療の柱となっていくと思われます。副作用管理など含め、治療の工夫が必要な分野であり、今後ますますの検討が必要となります。
最後にいつも同じことをいいますが、慢性肝疾患の治療においては肝予備能、全身状態の保持が重要であり、慢性肝疾患の原因の治療のみならず、栄養、筋肉を含めた全身の管理が今後ますます大切となってきます。肝がん治療においては副作用なく治療を行い、抗がん効果を最大限に得るためにも、背景肝疾患の治療や全身状態の保持が極めて重要です。主治医の先生、肝臓専門医ともよく相談しながら肝予備能、全身状態の保持に努めましょう。